

多視点同時撮影による分析 より美しく踊る段階への指導

田 口 機 子

文化創造学部文化創造学科初等教育学専攻

(2007年11月 7 日受理)

The Analysis for Simultaneous Photography From Many Viewpoints For More Beautiful Dancing

Faculty of Cultural Development, department of Cultural Development,
Major in Primary Education,
Gifu Women's University, 80 Taromaru, Gifu, Japan (〒501 - 2592)

TAGUCHI Noriko

(Received November 7 , 2007)

はじめに 現・創作ダンスで、小学校や中学校の児童生
徒を中心とした研究を進めてきて、運動の発
展や集団発達について明らかにして実践を積
学校教育における表現・ダンスを模倣・表

表1 表現運動・創作ダンスの基本的指導過程

対象学年		小低	小中	小高	中学	高校	大学
運動おどりの側面	熟練の過程	ばらばら におどる	まとまって おどる	美しく おどる	より美しく ダイナミック におどる		
	作品の様相	形や動き～形や動き～形や動き の特徴を 模倣	の感じを 表現	から受け た気持ち を表現	素材に対～素材をか～素材をか する考え を表現	りて自分 の考えを 表現	りないで 自分の考 えを表現
		模倣	～	表現	～	創作ダンス	自分の思いの表現
内 容	おどる・つくる	体の使い方	手, 足	胴, 腕, 首	胸, 肩, 顔	指先, 面, 目線	
		動き方	走る, 転がる 倒れる	跳ぶ, 回る 伸びばす, 縮める	倒れる, 摆れる そる	うねる, 捻る ずらす	
		時 間	自由 好きなだけ	場面構成 リズム, 強弱	間, アクセント 遅速		異時動作
		空 間	自由	円, 高低, 線	点, かたまり, 列		群, 散

んできた。その結果、およその動き方、動きの種類、共に踊る仲間の発展などの具体的な内容が分かってきている。(表1)今までの、動きの研究は、正面からの撮影で、児童生徒の動きを撮影・分析を行って学年発達をとらえてきた。

学年が小さいうちは、おおざっぱに変身して、全身運動として模倣ができればよいと考えて、動きも丸ごととらえてきた。

学年が進むにつれて、全身だけでなく、部位の使い方にも注目してきた。例えば、指先、脚の使い方、腰の使い方から顔、目線などである。もちろん全身、部位の使い方は、テーマ(表したいこと)が分かるように、伝わるように動かすことは言うまでもない。

感情移入が十分に入ったダンスも見られるようになってきている。しかし、年齢が高くなるにつれて、もっと全身に気配りをしながら踊り、より美しく踊ることが求められる。

1. 踊りの特性と全体構造

表現運動は、ルールや発展がわかやすい他の運動と異なり「おどりをつくっておどる」ところに大きな特性を持っている。それを構造的にとらえると図1のようになる。

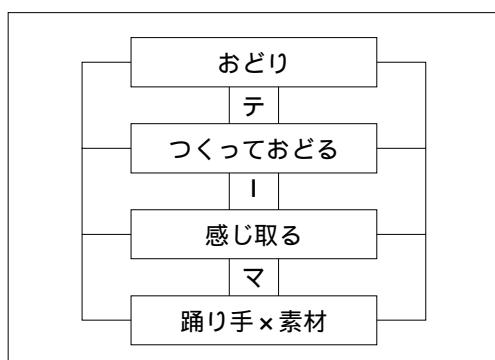


図1

この特性に基づいて、踊りの技能は次のように考える。

【全体技能】踊りをつくって踊る

【部分技能】

感じをとらえる

- ・表そうとするものの特性をつかむ
- ・それを表現する構想をたてる

おどりをおどる

- ・いろいろな動きをこなす技能
- ・体を美しく動かす技能

おどりをつくる

- ・時間構成に関する技能
- ・空間構成に関する技能

味わう

- ・自分(たち)の作品を観て豊かな心情にひたる
- ・他の作品を観て美的感情を深める

2. 動きの様相

表1で示したように様相の発展は次のようにとらえている。

表2

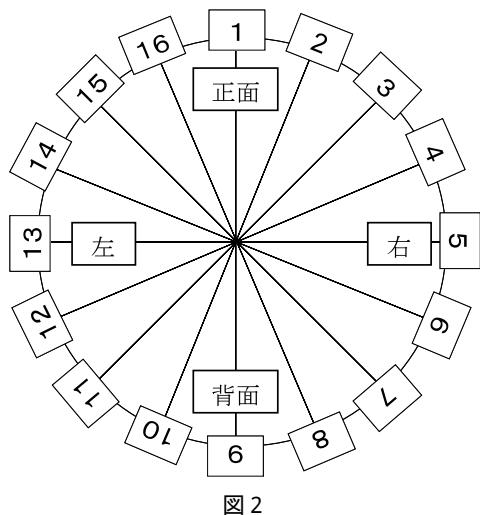
様相	おどりの熟練の過程
模倣	ばらばらにおどる(小低)
表現	まとまっておどる(小高・中)
創作ダンス	美しくおどる(中・高)
	より美しく ダイナミックにおどる(高・大)

中学校3年生あたりから高等学校にかけて「美しくおどる」、高等学校から大学にかけて「より美しく、ダイナミックにおどる」と発展すると考えるので、大学生には、より美しくおどる段階で追求させていきたい。

3. 動きのぶりの検証

「おどりをつくっておどる」が、実際おどっ

ている姿は、今までビデオカメラで正面から撮影しておどりぶりを検証していた。今回は、他の研究室での多方向カメラ（多視点同時撮影）による動きの分析に一緒にさせていただく機会があり、幼児文化学専攻の学生と初等教育学専攻の学生に協力をしてもらい、16台のカメラで撮影することができた。



実際おどっているときは、「指先に気を付けて、胸を張って、首を回して、顔を背けて」とか意識しながらおどっている。しかし、胸を張ったときに背がどのくらいそっているのか、指先までのばしているつもりが横から見たら肘が曲がっているのでは、と意識しておどってこなかった。表1のように動きの発展を考えてきたが、きめ細かい分析はできていなかった。

そこで、今回の多視点同時撮影によって、背面や側面から一つの動きを見てみることにした。

4. 多方面からの分析

今回の撮影に当たって、3人の学生にテーマを決めておどってもらった。

3年	Y・Tさん	「希望」
2年	M・Iさん	「悩み」
2年	Y・Yさん	「雑草のごとく」

以上の3人に、それぞれのテーマを創作しておどってもらった。

(1) のY・Tさんのおどりから
= 体のこなし =

Y・Tさんのおどりは、同じ3年生の中では上手くおどっている学生だが、今回、やや迫力や緊迫感に欠ける趣があるが、これからの自分の人生への「希望」を伝えたいとおどっている。



写真1



写真2

写真1の正面からの姿を見ると、抱え込むような姿でおどっている。しかし背面の背中に緊迫感が感じられない。背面までの配慮がかけている。同じ動きを、左側面と右側面から見てみると



写真 3



写真 4

胴の部分に神経が行き渡っていない感がする。豊かな自分を求めて、内にたくさんの思いをこめておどろうとしているが、十分におどりきれていない動きになっている。

写真5は、「悩みを抱えて苦しむ」ところの動きであるが、どの位置から見ても体のこなしができているようである。特に腰の入れ方で強さが出ている。

(3) Y・Yさんと M・Iさんのおどりから = 部位の使い方 =

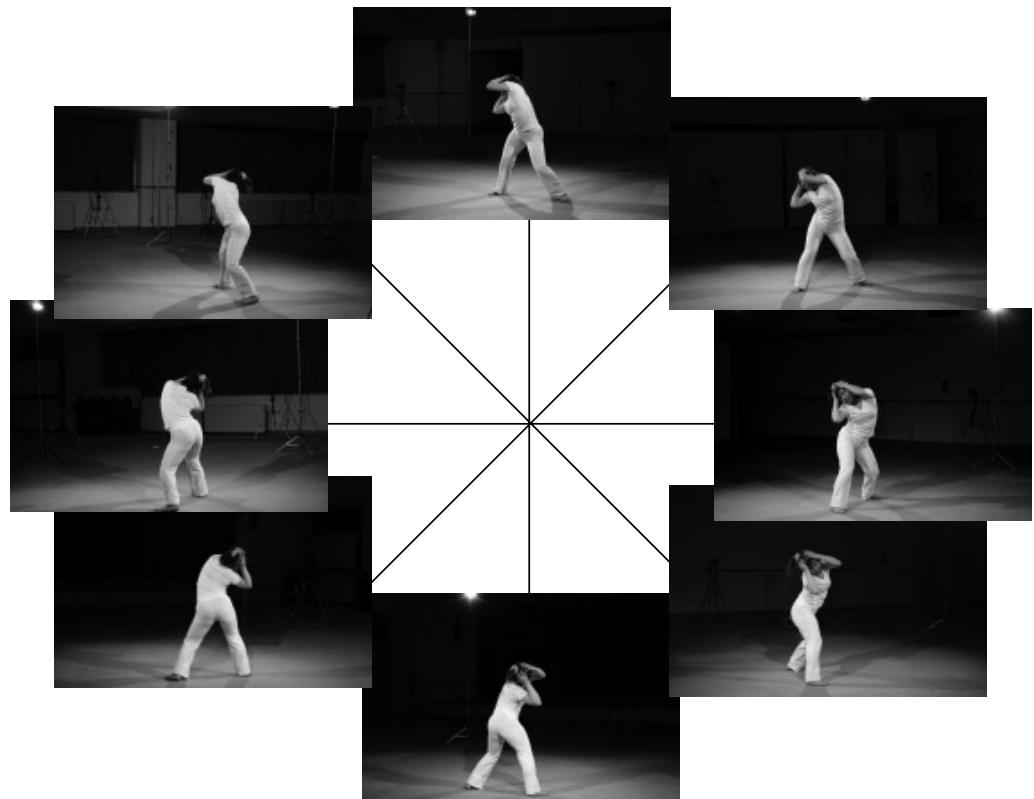


写真 5

より美しくおどるには、指先、あごなどの細かい部位に気持を込めると気持が伝わってくる。

写真6（雑草）や写真7（悩み）は、指先まで意識されているように見えるが、方向によっては、十分意識されているように見えない。

顔については、写真8（悩み）では後ろ向きで分からぬが、背面の写真9を見ると正面ほどの迫力がないことが分かる。



写真6



写真7



写真8



写真9

ダンスは、全身で、心から踊るように指導はしているが、正面から見えない部分、部位に心が集中すると忘れがちな部分があることが分かった。

3人ともに、全身でおどろう、表したいこと等を意識しておどっている。そのために、手、腕、肩、腰、胸などを意識しようとしてはいるが、全ての方向からもその意識が伝わってこない。顔（面）、目線などもしかりである。

5. 成果と今後の課題

以上、3人のおどりを見てきたが、多方向から一つの動きが見られたことによって次のようなことが分かった。

きめ細かい指導をするために多視点同時撮影は、非常に大きな役割を果たすことが分かった。

全体的には、全身、指先、を意識して伸びる、縮む等の動きの変化を付けておどっていることが分かった。ここで学生の思いを記してみる。

おどっているとき「雑草」になりきることを意識していた。特に「太陽が見えてきた！もっと伸びよう！！」のような気持ちを心の中で唱えていたのでスムーズにおどれた。しかし、撮影したおどりを

観ると指先や足先、表情など細部まで表現しているつもりが、腰がうまく使えないなかったり、背中まで神経がいってなかったりしていることが良くわかった。また似ている動きが多かったので、もつと「雑草」を掘り下げて考えてみなければいけないと思った。

……おどりの感情の変化に応じて強くおどるところ、脱力するところを意識しながらおどった。撮影したおどりをみたとき全体の流れはきれいに進んでいた。「伸びきる縮みきる」は、きっちり大きくおどれていた。しかし、まだまだ、背中への神経がいってなかったり、一步の踏み込みが崩れていたりした。

というような感想を持ったようである。二人とも、反省点を改善してより良いおどりをおどりたいと願っている。

課題としては、最も考えなければいけないことで、16題のカメラのシャッターを押したのは、他の目的で研究している人だったので、テーマに

ふさわしいおどり、最も盛り上がりの動きの所でシャッターが押せなかつたことである。指導者がシャッターを押すことが望ましい。

感想の中にもあるように、背中を意識することや、顔、目線がはっきり分かるようにする。静と動のバランスなども考えることが美しくダイナミックなおどりに通じることになる

16方向の前に、8方向でまず分析してみてよい。まだまだ、学生のおどりが未熟なため、微妙な動きまで分析できないからである。

ビデオによるおどりの流れと、テーマの追求との平行で一つ一つの動きのうまさをみるとおどりの良さが分かるのになるのではないかと思われる。

このような課題が解決できるような研究を続けていきたい。

今回、こういった機会を与えて下さった後藤忠彦副学長、久田由莉さんはじめ岐阜女子大学大学院文化創造学研究科の皆様のご協力に深く感謝します。